

「なるほど、確かに君は何も知らないよ。そのことの意味、私は理解しますよ」

僕を捕まえた女の子とは随分と違う。もの静かな男だった。落ち着いた眼鏡に軽く整えられた髪形が、物腰の柔らかさを更に印象付けた。「理解」などという嘘臭い言葉にも、確かな真実味を感じさせる。

「でも、私の理解だけじゃ足りないぐらいに、君に関しては報告があります。

だから逮捕しました。ですよ、隊長？」

「その通りだ」

部屋の隅に少し離れて、あの女の子が立っていた。

「私が調べた限り、この男こそが美少女連続変態玩具化事件の最重要容疑者だな」

得意気な顔で言っている。

そう。話を聞くに、どうやら僕は逮捕されてしまったらしいのだ。

それも、知りもしない変態事件の犯人として。馬鹿げた話もあったもんだ。

「・・・その事件とやらの存在すら、僕は聞いたことが無いんですけど」

「ふん、追い詰められた鼠は皆同じことを言う。戯言で己が罪を消せると思っているのなら大間違いだぞ！！」

「話にならないので、責任者の方を呼んでくれますか？」

「責任者なら彼女だよ。何しろ『隊長』だからね」

「終わった・・・！！」

「でも、安心して下さい。この現場は私の管轄です。脳味噌まで筋肉に化けた、おっぱいも可愛げも無い隊長とは違いますから」

「その二枚舌、三枚に下ろすぞ。粗チンのエイズが」

「ああして勝手なことを言うのがうちの隊長の趣味です。名誉の為に言っておきますと、この私、隊内では綺麗なヤリチンで通っていますので」

なんか笑ってくれてるけど、綺麗なヤリチンとかありえないですから！！

とは思っても、被尋問中の身。何と無く、こちらも笑いを返しておく。

「何かおかしいですかね。ゴミのくせに」

「え？」

聞き違えたかと思ったのに、髪の毛を掴まれ、机に叩き付けられた。

ゴッ

耳慣れない音。それが何回も続く。

「君は今、私の前で嘘の笑いをしました。わからないと思って。許せませんよ。その手の疑似餌的な何か。職業病と言ったっていい。ゴミは潰したくなる！！中身が腐るまでね」

そんなこと言われたって、何の意味も無かったのに！！

ゴッ ゴッ

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい！！」

僕はすっかり動転していた。鼻が砕けたかもだけど、どうだってよかった。

殺される！！この男の方こそ、とんだ嘘っぱちじゃないか！！

「それぐらいにしとけ。捕まえるのが仕事だろ。捕まえる奴に死なれちや金にならん」

「・・・ですってさ。残念」

『隊長』が嗜めた。というよりも、助けてくれたのかもしれない。

「食えない奴め」

苦い顔をしている。

「隊長は甘いんですよ。ごめんて済むなら警察はいらない。昔から言うでしょ？」

「でも、こんなことしなくたって・・・」

「君は童貞なんですよ？彼女がいるのに」

ドキリとした。僕の最もプライベートな事実。

大事にしたかった思い出の話で、隠してきた過去の話だ。

「なに、事実だとしても気にすることはありませんよ。私みたいな人間よりはよっぽど信用されるんじゃないですか？就職先も決まったそうで万々歳じゃないですか。何でしたっけね・・・SEとか何とか。かっこいいですよ、羨ましい」

わざとらしく肩を叩いてくる。嫌な感じだ。また助けてくれないかと女の子の方を見てみても、今度は涼しい顔をしている。

何でだ？

何で知ってるんだ？

考えていたら、携帯が鳴った。

呼び出し音は嫌いだから、ただのバイブだけど。

「彼女さんからですね」

僕は確認する。彼女からだった。そしてまた考える。僕が携帯を見るよりも先に、彼が言い当てたことについて。

男は笑っている。

大人しい男だなんて、もう絶対に思えなくなった。

「別に気にしないで下さい。寧ろね、私は凄いいことだと思いますよ。確かになれるんじゃないですかね、SEには」

メールを開く。『死ねよロリコン』と書いてあった。

「でも、簡単にハッキングされるようじゃ良くない。君の彼女も悲しんでるんじゃないですか？心を持たない、ゴミにも劣るバーチャルで非存在な妄想とは言え、短い付き合いで

はないんでしょう？」

また震えたのでもう一度開く。『死ねよロリコン』と書いてあった。

何件も何件も、次々に届く。

震えているのは僕の手の方なのかもしれない。

「君は嘔吐きだ」

彼は言った。

「ただの無職の薄汚い男で、学生ですらない。近所でも評判の、ずっと灯りは付いているけど意味がよく分からない、怖い、気味が悪い、キモい、知りたくもない、ただのヒキコモリだ。彼女なんざいた試しは無いし、友達だって知らない。たまのお昼に公園でブランコ。一体何を考えているのか！！気持ち悪い！！男が！！外を！！歩いてるんです！！下で暮らしているあいつは！！深夜に歌っているあいつは！！誰？？助けて下さい！！」

と、引切り無しのラブコールですよ。特定するのは楽な仕事でした。あなたが電機的に彼女を作り、携帯メールを通じて仮想的な恋愛行為に興じているとわかったときには、こちらも散々笑わせてもらいました」

「おい」と隊長。「話が長い」

相変わらずの緩い笑みを浮かべながら、男が謝る。

僕は黙っていた。

「申し訳ありませんでした。一度しゃべり出してしまうと止まらない方なもので。時間は貴重です。単刀直入に行きましょう」

呆然とする僕の前に、一枚の写真が置かれた。

知らない写真だ。

女の子が映っている。多分、幼稚園ぐらいの。

目隠しを付けて、遊んでいるみたいだ。

裸で。

頭に玩具の犬の耳を付けて、お尻の穴に尻尾のようなものも付けられて。

遠くから男が手を叩いて、おいでおいでをしている。どうやら写真の女の子は、そこに向かわなければいけないらしい。腰から下は素っ裸になって、雄としてのものをギンギンにさせている奴の元まで。

何があったかわからないが、両の手足が無くなり、芋虫のようになっているその体で。

涎と涙を垂らしながら腰の上下を繰り返し、辿り着かなくてはならないらしい。

そこまで理解して、僕は吐きそうになった。でも、次のことに気が付いたとき、その吐き気すらも引いてしまった。

あの男は僕だ。

「知りません！！」

気が付いたら叫んでいた。

「知りません、こんなの！！僕がこんなことする・・・やれるわけじゃないじゃないですか！！」

「そうは言いましてもね・・・」

あからさまに困った仕草を入れてみせて、彼は写真の男を指差した。

「これ、明らかに君でしょ？」

「違います」

「違わないでしょう。同じ顔、同じ体です。ねえ、隊長？」

彼女は頷く。確かに、僕自身だってそうは思う。

「でも、違うんです！！僕にこんな趣味は・・・」

「ありますよね？」間髪入れずに返されてしまった。「君が個人データの中に、同様の趣味画像を大量に保有していることは確認済みです」

墓穴を掘った。それとこれとは別だと主張したところでどうしようもない。

「それでも違う・・・違うんですよ！！」

声を枯らす。こんなことになるなら、消しておけばよかった。僕を暗い童貞人生から救い出してくれたオナネタの数々。それが僕を殺す側に回るなんて・・・

「残酷過ぎる！！耐えられないに決まってるじゃないですか！！」

世界中でひとりぼっちになった気分だ。男泣きに限る。

「わかった、わかった。黙れってうるさい」

頭を掻き毟って、隊長さんはイラついている様子だ。

「代われ、桜城」と眼鏡のことを小突く。

「お断りします。こういう作業は、脳筋の隊長には向きませんから」

「そのお前のやり方じゃ罅が空かねえからどけて言ってんだよ！！」

ガツンと一撃。ド突き落とされてやんの。

「さあ、選手交代だ。私はこいつみたいに小ズルいやり方はしない。安心しな。正々堂々乾坤一擲。それが信条だからな」

ドカンと腰を下ろした。

瞬間に消えてしまった。

背が低すぎるからだ。あれやこれやですっかり意識しなくなっていたが、見た目は小さな女の子なのだ。思わず僕が失笑してしまうと、桜城が助け舟を出す。

「失礼ですが隊長、大きなお椅子をお持ち致しましょうか？」

「要らん！！嫌味に言いやがって！！」

またガツンと一発。手が早くて扱いつらそうだけど、正直胸が空く思いだ。嫌味な奴だったよ、桜城・・・

「そんな侮蔑を受けるぐらいなら・・・私は立つ！！立って虜囚の辱めを受けず！！」

「あ、顔、見えるようになりました」

「ニャハハハ！！これで万事解決だな、桜城！！」

自慢げにしている。これからはチビちゃんと呼ぼうかしら。

「わかりましたよ。勝手にやって下さい」すっかり呆れ顔だ。「ちゃんとしたお考え、秘策

の一つぐらいがあつてのことなんですよね？」

「星の教程な」

うそくさッ！！と思ったのは僕だけじゃあるまい。眼鏡の彼の顔にもしっかり出ていた。

ゲフンと、彼女は大笑いに咳払いをする。先程までの重たい空気から一転、だんだん子供とごっこ遊びしてる気分になってきたぞ。

「さっきは桜城が失礼したな。こいつは加減を知らなくてね、悪気は無いんだ。許してやってくれ。私も彼も、お前を貶める為になっているんじゃない。寧ろその逆だ。お前を助ける為になっているんだ。」

星の教程のお考えとやらは知らないが、いきなり凄い掌返し振りだ。

「嘘だね」

「と、とにかく聞きたいことから聞かしてもらおう。今日の夕方だな。お前、何してた？」

「外に出ました。・・・彼女に会いに」

言った途端、盛大に吹かれた。悪いわるいとか言いながら、重ねての失笑。「別に他意は無いんだ、うん。うん。・・・だよな、その筈だよな」と、ご丁寧にもハッキング済みの告白。まあ、もう知ってるから構わないんですけどね。後ろの方から、桜城がチラチラと心配そうにしている。確かに向いてないわ、あんたの上司。

落ち着きを取り戻し、改めて僕を見るチビちゃん。

「なるほど、彼女に会いに行ったと」

「あくまで電機的だから、適当にブラついて時間を潰してただけなんですけどね。これが意外と難しくって・・・沈んでくれないんだもんなあ、太陽」

また吹かれた。再開するやいなや、今度は顔を背けてのフリーズ。肩が震え出した。弾けそうになる笑いを堪えて、どうやら動けなくなっているようだ。

そんなか？そんなに面白いか、俺の彼女話？

これはこれで、桜城のときよりもくるものがあるぞ。

「いや、すまなかった」キリリと、平静の状態に戻って「人には其々の愛があるものだ。それについては何も言わない。ここからが本番だ。桜城、例の奴を」

「はい」

桜城の手からチビちゃんの手。チビちゃんの手から机に。届けられた秘密兵器。

また写真だった。さっきの例があるから思わず目を背けてしまったが、今回は違った。普通の写真だ。また幼稚園ぐらいの女の子ではあるが、幸せそうなものだ。花冠を着けてにっこりと笑っている。何か引っかかるものがあるような気もしたが、先の写真との落差のせいだろう。同じ年頃の子で、こうも変わってしまうことが不思議な感じだった。

それに、この女の子はとても綺麗だ。丸い笑顔の中心に、思わず摘まんでしまいたくなるような鼻。ようやく長くなり始めた髪は小さなりボンで結えられ、まだ頼りないピースサインが画面の中を踊っている。くりくりとした瞳が強くこちらの心を捕える。この写真を撮ったお父さんなりお母さんなりへの、信頼の表れのようにも感じられる。

「この女の子、知ってるか？」

「知らないです」

「本当に？」

「本当です」

「本当にい〜？」

「・・・疑われたって、知らないものは知らないですよ」

チビちゃんは溜息を吐いた。

「お前、ほんとにクソみたいな引きこもりなのな。お前のすぐ近くの家で暮らしてた女の子だよ、この子は」

「すみません」

何と無く謝ってしまった。

「いいんだよ、別に。まだお前がやったって決まったわけじゃないし」
やうた。

確かに彼女はそう言った。この段階では、まだわからないことだったけど。

「おい」

身振りで次の桜城の行動を促す。

また写真が届いた。同じ写真だと思った。

同じ女の子が、同じようにピースサインをして、同じようにこちらを向いて、花冠を着けていた。笑ってるし、リボンだって一緒だ。

でも、よく見たら一ヶ所だけ違うところがあった。心を射抜く、くりくりの瞳。それが感じられない。いや、見付けられない？何だろう？妙な違和感。考えている内に、さっきの引っかかりの正体に気が付いてしまった。

でも、何でこのタイミングで？そのことにまた戸惑ってしまう。

「何か思い出したって顔だな。話せ」

身を乗り出してくるチビちゃん。どうせ殆どばれてるんだ。

「会ったことがあるってだけです、この子に。」

思い出してしまいました。哀しい女の子なんですよ」

僕は会ったことがある。

子供の泣き声がうるさかったのだ。

昼間から叩き起こされて、僕は不機嫌の極みだった。公園からだ。ガキ共のせいでいつもこうなる。とは言え、文句を言える筈も無い。世間はダメ人間に厳しいものだ。大丈夫、暫く大人しくしていれば収まる。台風と同じだ。

それは楽観的に過ぎる見通しだった。ずっとうるさい。人間は猿だと実感するから、こういうのは嫌いだ。起きちゃったついで。「彼女」からのメールも溜まっている。少し出か

けようか。最後に外に出たのは三日前の話だ。起き上がるだけで、体内のエネルギーが消費されるのが分かる。人間、空腹が過ぎるとこんな風になるのだ。更なるついでに、うどんでも食べてこようか。

重いドアを開ける。

泣き声がかくなって、僕が卵なら割れちゃいそうな感じだ。

公園の高い木の上に、青い風船が見えた。

合点がいく。台風が過ぎていかないわけだ。あれがあそこに見える限り、子供の方は諦めが付かない。木の下でぐずっている女の子は幼稚園ぐらいで、隣のお母さんが無理に担いで行くにしても難しい。筆舌に尽くし難い抵抗を受け、泥沼の戦争となるだろう。

「いい子だから我慢しよう、ね？別の風船買ってあげるから」

「やだ〜〜あれがいい〜〜！！」

など、典型的なミスを犯している。ガキにとっての風船が、風船であって風船でないのは常識。「幼稚園でおててを繋ぎたいあの子」と同等、いや、それ以上が相場。取り換えは効かない。粹なナイスガイの登場が待たれる。

・・・て、もしかして、僕？

「本当にすみません。娘のわがままの為に」

「頑張れ、おじちゃん！！」

気分が出しゃばってしまった結果、十年はご無沙汰の木登りに挑戦となった。

「これでも、昔はのぼり棒が得意だったんですよ」嘘を付いて笑っておく。ちょっと震えながら、いけそうなルートを探す。こうなれば子供ははけるとしたもので、「早く早く〜」と囁し立てながらゴキゲン。君のせいで、僕はピンチだけどね！！

このまま馬鹿みたいに取りに行くのも癪だ。ちょっとした提案をすることにした。

「おじょうちゃんも一緒に登るかい？」

「わあ〜〜、やりたいやりたい！！」

案の定、目を輝かせてきた。

「じゃ、おじちゃんで行こう。おじちゃんが少しずつ運んでいってあげるから、ちゃんとおじちゃんの肩に腕を回して掴まってるんだぞ」

「おお〜〜！！掴まってる〜！！」

女の子は興奮状態。やる気満々だ。

「あの、それは・・・ちょっと危くないでしょうか？」

当然と言っていい、お母様からの一言。うん、その顔が見たかった。

「何事も経験ですよ、奥さん。娘さんにとってはそれこそが宝物なんです。

大丈夫！！のぼり棒マスターの僕が付いてますから！！」

「そう言われるとそんな気も・・・わかりました、お任せ致します！！」

僕達は熱い握手を交わした！！子を持つ母はちょろい。

その想像を絶する高さ。愛娘の泣き感う姿を見せてくれるわ！！

「出発進行〜〜！！」

俺の邪まな思いとはうらはらに、テンションMAXな女の子。

逆に、一歩目から既に後悔気味な僕。こいつ、意外と重い。

「おじょうちゃん、いくつになるの？」

「五つ！！」

「じゃ、年中さんだね。来年から一番のお姉さんだ」

「ううん。サクラは年長さんだから、一年生になって、また一番小さい子になるんだって」

「ふ〜ん」道理で重いわけだ。覚悟を決めてコブを蹴った。折れないのをよく確認して、最初の枝に足を乗せる。一気に体を上げた。

「ワアアアアアア！！凄い！！速い！！凄いじゃん、おじちゃん！！」

「そりゃ、おじちゃんは若いおじちゃんだからね。そこらのおじちゃんとは違うんだよ」

「ヒヤアアアアアア！！」

こちらが凄いと叫びたいテンション。まだ大して高いわけでもないのに。

「何か見えてるの？」

「何も見えない！！」

「何も見えない？」

「何も見えないの！！葉っぱの中に入っちゃったから！！何も見えないんだよ！！」

凄い！！って言ってる。何も見えないんじゃ、怖がるも何も無さそうだな。失敗か？
もう一段、上に登る。

「そういうのはね、わからないって言うんだよ」

「凄いだよ！！だって、知らなかったんだもの！！」

「お母さんは見える？」

下を意識させると、少しはビビるかもしれない。

「見えない！！見えるけど、ちっちゃい！！」

「見えない」じゃ「ない」じゃないかと思ったけど、この様子じゃ意味が無さそうだな。
おまけに、僕の肩に掴まっている最中だというのに、お母さんに向けて手を振り始めた。

「こら、暴れるな！！落ちるだろ」

俺が支えてやると、またテンションが上がった。

「ワァァァァァァァァァァ！！」

叫んでいる。

これじゃ、本当に猿だ。僕も含めて。そういうところが大っ嫌いなのに。

でも、下では彼女のお母さんが、そんな僕達の様子を見て顔を青くしている。

何か少し違うけど、これはこれで目標は達成できそうな感じか？

風船のケツが見えてきた。

どちらの方も、もうひと押しだな。

「風船！！」と僕の顔を押しやる。彼女も気が付いたみたいだ。

「なあ、おじょうちゃん」

「サクラ！！」

「サクラちゃん？」

「うん！！」

目的の方向に誘導する為、僕はわざと勿体を付けた。天辺の、風船の方を見やりながら。

この子が楽しんでいるというなら、その気持ちを使って、もっとお母さんを驚かせてみたいと思った。

「せっかくここまで来たんだ。やりたいことはないかい？」

「やりたいこと？」

「そう、やりたいこと。ここは今、せっかく一番高いところなんだ」

「やりたいこと・・・」

僕には見えない肩のところで、サクラちゃんは考え込んでしまった。思い付かないのかもしれない。空いている手で、風船の方向を差してみせた。

「風船を取りたい！！」

「そう、風船を取りたい？」

「取りたい！！」

「そっか」

エヘンと、僕は袈裟に咳払いした。

「ここから先は、自分でやってみるか？」

「やる～～～！！」

「よし！！強い女の子だ、サクラちゃんは」

止めて下さいと、お母さんが言っているのが聞こえたが、もう治外法権だ。

いくべきルートを教えてやる。

「いいかい、絶対無理はしないこと。無理そうになったらおじちゃんを呼べ」

「わかった！！」

頭上の枝に彼女を乗せてあげる。僕の視界では、風船のケツがサクラちゃんのケツに入れ替わった。そのケツを軽く叩いてやる。

「行ってこい！！」

「うん！！」

もしかしたら初めて、彼女はコブを蹴った。折れないのをよく確認して、彼女の最初の枝に足を乗せる。一気に体を上げた。それで風船に手が届く筈だ。

「ア！！」

ケツが言った。

「風船・・・」

「取れたか？」

「アアアアアアアアアアアアアアアア！！」

「どうした」

ただ事じゃないと思って、僕も登り始めた。

「ヒャアアアアアアアアアアアアアア！！」

凄いだよ、凄いだよ、凄いだよ、彼女は連呼した。

「どうした。何が凄いだよ？」

「凄いだよ、わからないが、だよ！！」

サクラちゃんは風船を取り損ねていた。青い風船は飛んでいった。空に。

じゃあ、何が凄いだよか、彼女の隣にまで上がってわかった。僕の肩に乗かって叫ぶ。

「ここ！！高い！！凄いだよ！！高い！！」

「だから、暴れると危ない」

「おじちゃん凄いだよね、凄いだよね、ここ！！おじちゃん、お父さんみたい！！お父さんみたいなんだ、おじちゃん！！」

風船が引っ掛かっていたそこは葉っぱの外で、僕には町が見えた。だから興奮したんだと思った。取り敢えず、ここは同意しとかなないと收拾が付かない。凄いだよ！！と僕も言うておいた。何でも見えるよ！！

ちょっとした冒険にサクラちゃんは大満足だったようで、エキサイトした形そのまま公園の中を走り回っている。少しは怒られることを覚悟して木から下りた僕は、サクラちゃんのお母さんに謝られて逆に困ってしまった。お父さんだなんて申し訳ない、だと。サクラちゃんは二歳で、お父さんを亡くしていたらしい。

ふ～ん。と、僕は思った。

「来年から小学生なんですってね」

「はい」

「良かったじゃないですか」

「はい」

そう言えば、腹が減ってたんだと思い出した。軽く挨拶をして、僕はうどんを買いに向かった。家に戻ってきたときには、公園は空だ。サクラちゃんは目が凄いだよ綺麗だった。大して高いわけでもないのに、何が覚えてたんだらう？風船の代わりに、町の代わりに。もしかしたら僕の代わりに。

「哀しい女の子だったんです」

チビちゃんに繰り返しながら、僕はもう、この部屋から出たいと思った。

写真で久しぶりに再会したサクラちゃんは、ピースサインをしていた。花冠を着けて、やはり元気に笑っていた。リボンなんか、あのときと一緒に。

それなのに変わ。

これはサクラちゃんじゃない。

目が、抉り取られているから。せっかく綺麗だったのに、抉り取られているから。

網膜の暗い白が、抉り取られた奥の方で、ぼんやりと光っている。

ぼんやりと光っている？

おかしい。

前の写真と比較して、強いフラッシュ。何かを強調するように。穿たれた穴。その闇の中で、やはり何かぼんやりと光っている。その何かは、揺れているようにも見える。

「どうした？」

チビちゃんが聞いてきた。僕の様子に、ことの異常性を感じたのかもしれない。

「涙だ」

僕はわかってしまった。

「これ、涙なんだ」

網膜が露わになった姿は、僕の好きなエロ漫画で何度でも見てきた。

でも、こんなのは知らない。

ぽっかりと空いてしまった眼窩に、涙腺から出た涙が、行き場を無くして溜まっているのだ。湖みたいに。揺れてる。

「これ、涙なんだ」

何でだろう？

本当に、僕は泣けてきてる。

「ああ、そのことか」チビちゃんはあるさりとってのける。「確かに、それは涙なんだろうな。で、どうなんだ？知っている子に間違いは無いのか？」

はい。僕は答えた。「サクラちゃんという子です」

確認済みなのだろう。チビちゃんと桜城が、互いに頷き合っただけだ。

「次」

「はい」

またサクラちゃんの写真が出てきた。

花冠を着けてる。ピースサインも一緒だ。

でも、リボンは見えなかった。その代わり別のものが見えてる。

チンコだ。

彼女の両の目の穴に、チンコの亀頭部分が侵入していた。写真では金玉の部分が妙なアクセントになっていて、あたかも昆虫の目が生えてきたようにも見える。

眼窩にあった湖が零れて、本物の涙みたいだ。

「次」

「はい」

射精されたサクラちゃん。ミルク塗れだ。

目からは精液が溢れて、変な雪崩みたいになってる。

まんこの辺りが、変にグジュグジュしているのが気になった。

「何ですか、これ」質問してみた。

「おそらく、コテで焼き切ったんだ。穴が小さくて、入らなかったんじゃないか」

次。そう言えるチビちゃんは凄い。

木馬のサクラちゃん。

吊るされたサクラちゃん。

縛り首なサクラちゃん。

切られてるサクラちゃん。

開かれて焼かれちゃう。一部ホルモンなサクラちゃん。

飛び出す絵本みたいに、アバンギャルドになれた乳首。

生爪のカリカリパスタ。

やっぱり、芋虫に団子。

ステーキにスープ。

分身したみたいに分割された頭部は、凝ったオブジェみたいだ。

写真が進むごとに、サクラちゃんは分解／調理／造形されていった。

「最後だ」

最後らしい写真が出てきた。

よくわからない写真だ。

「・・・たわしみたいですね」

いや、サンゴか？撮影場所は、どこかのゴミ置き場か。

「これがどうしたって顔をしてるな」

「はい」

チビちゃんは、たわし(or サンゴ)を指差した。

「奴等は女の子達に特殊な薬を注射している。薬なんて言うと科学的な産物のように聞こえるだろうが、これは魔術に近い。その薬は使用者に千倍の快楽を与え、奴等のお遊びに足りるだけの生命力も与える。強力な薬だ」

「それはヤバい薬ですね」

そうとしか言えなかった。

「そう、ヤバい薬だ。但し、これらの全てには代償が伴う。」

「・・・何ですか？」

チビちゃんが、今度は僕のことを指差す。また酷いことを言われてしまうのではないかと怖くなったが、別に僕のことを指差していたわけじゃなかった。

「脳だ。目を追うごとに脳のニューロンが海綿体に変化していき、変化したそばから次々に励起していく。噂によると、これもまた強烈な快楽を伴うらしいが、まゝ意味はわからないわな。お前がたわしだと言ったものは、その成れの果てだ。被害者の女の子が残した脳味噌の欠片だ。ミクロなチンコニューロン達がフラクタルに成長して、たわしみたいになってる」

「気持ち悪い」

「気持ち悪かろうと何だろうと、奴等は徹底的な快樂者達だ。徹頭徹尾犯す。注射する。そうしてできた海綿体の塊を、女の子が生まれ育った土地・・・人目に付く場所の何処かしらに放置していく。それがその写真だ。」

「気持ち悪い」

「我々に対する当てつけかはわからないが、とにかく奴等は・・・」

俺は机を叩いた。机を叩いて、無理やりチビちゃんの口を止めた。

「さっきから気持ち悪いって言ってますよね！！あんたは、何を平然と！！」

「お前がやった。やったからに決まってるだろう」

「違う！！」

誰もしゃべらなくなった。僕の荒い呼吸音が部屋に響くだけだ。

「なあ、桜城」

「はい？」

「お前が気にしてた秘策ってやつ、見せてやるよ」

言うなり、チビちゃんは机の中に消えた。

何が起こるのかと思っていたら、股間の方に妙な感触。

「やはりな」

机の下から、チビちゃんの声。

「しっかり勃ってるじゃないか、変態。調査済みなんだよ、こっちは」

「そ、そんなことは・・・！！」

あった。

サクラちゃんの一連の写真を気持ち悪いと思いつつ、僕はしっかりと勃起していた。それこそ僕は、哀しい男の子なのかもしれない。

僕もすっかり観念していたら、ここで新たなる展開を迎える。

ジ〜ッと、チャックを開ける音が聞こえた。

「ちょ、ちょっと、何やってるんですか！？」

「何、どうせなら少し、手伝ってやろうかと思ってね」

も、もしや！？

などと考える間も無く、腰の方に熱い感触。行き交う粘液に、柔らかな肉の流れ。

「ひゃう」

未知の感覚に驚いてたじろぐ。その拍子に、これもまた未知の痛覚。

「ギャア！！」

「馬鹿、動くと噛んじゃうだろ。て、童貞のお前には無理な相談か」

「あの、もしかしてこれって、フェ・・・」

言い終えぬ内にポンと口を離され、金玉から筋にかけて舐めあげられた。

「悪いな。どこらへんだった、噛んだの。舐めてやるよ」

言いながら、亀頭の淵をなぞるようにされる。どの辺りがどうか聞かれたって、あまりの事態に僕の頭は回らない。

「わ、わかりません！！」

「面倒臭い奴め」

垂らした唾液をローション代わりに、深く啜えられてしまった。そのまま、僕のを舌で包むようにされる。

あったかい。そう思った。在りし日の母のようだ。

なんか・・・癒える！！癒されてる気がする！！

「何だか、痛みが無くなったような感じがします」

またポンと勢いよくものを出された。気圧差に温度差、密閉空間からの脱出。その斬新な解放感が、今は明らかに快感となっていた。

「ふふん、だろ？」

得意げになったチビちゃんは、今度は掌を僕の先端に差し出し、そのまま指を前後させながら高速回転を始めた。滝に身を投げ出したかの如き轟音が部屋中をうねらす。

「こ、これは！？」

「ま、幻のコークスクリュー！！」

桜城が慄く！！

「それも癒しのホイミリップスからの合わせ技とは・・・羨ましいぞ、変態！！私も受けてみたいものだな」

「あああ、僕の大切にしてきた純潔がアホっぽい技の餌食に～～～！！」

「ニヤハハハ、これでフィニッシュだ！！」

ヘッドバンギングを超える驚異的ストローク。奇跡のディープスロート。

「があああ、ちょっと痛いけどこれは無理！！イク！！イッてしまう～～～！！」

屈辱的な流れの果て、ジャスト1分。チビちゃん、口からミルクを試験管にイン。

「ッしゃあ！！こいつをDNA鑑定だ、桜城イ！！真実をもぎ取ってこい！！」

「さ、流石は隊長・・・画期的なアイデアですよ！！その為のおフェラとは不覚！！なんという冷静で的確な判断力、科学捜査なんだ！！」

「あの～、こんなので大丈夫なんですか？」

あまりの展開。というよりも、あんまりの展開にツッコんでしまう。レモン水でうがいをしながら桜城と顔を見合わせ、チビちゃんの答えは猛烈なサムズアップだった。

「警備の為なら何をしてもいいのだ！！」

なるほど、そんなものなのかもしれない？

内心、僕はほっとしていた。これで結果が出れば、おそらく僕の無実が証明される。サクラちゃんの件は確かに悔しかったけど、それはそれで過ぎたことだ。僕に何とか出来るようなことじゃない。写真に「僕」がいたのだから、何かの間違いだろう。

長い夜の入口にすら立てていなかったことも知らずに、僕は気楽に考え出していた。